

アブ・シール

河合 望*

1. 遺跡のエジプト学的特質

アブ・シールは、カイロの南南西約30kmに位置する古王国時代の大規模な墓地に代表される遺跡である。ギザ、サッカラ、ダハシュールと並んでメンフィス・ネクロポリスの重要なエリアである。アブ・シールの南には、同じく大規模な墓地であるサッカラ遺跡があり、サッカラ遺跡の北側の続きである一方で、独立した遺跡として形成された。アブ・シール遺跡は、サッカラ遺跡と同様にその東側に位置したと思われる古代の首都メンフィスの存在が大きく関係していると考えられている。なお、アブ・シールの名前の由来は「オシリス神の家」を意味する「*pr wsir* (ペル・ウシル)」のギリシア語訛りであると考えられている。

アブ・シールで最も古い遺構は初期王朝時代に年代づけられる。これらの遺構は単純なシャフト墓あるいは土壙墓で、アブ・シールの南端部に位置する (Bonnet 1928)。続く古王国時代第3王朝および第4王朝にはその付近に大型マスタバ墓が造営された。第4王朝時代の開始とともにアブ・シールにおける建築活動は、停滞したが、第5王朝の開始とともに活発化した。最初に巨大記念建造物を造営したのは、第5王朝初代のウセル

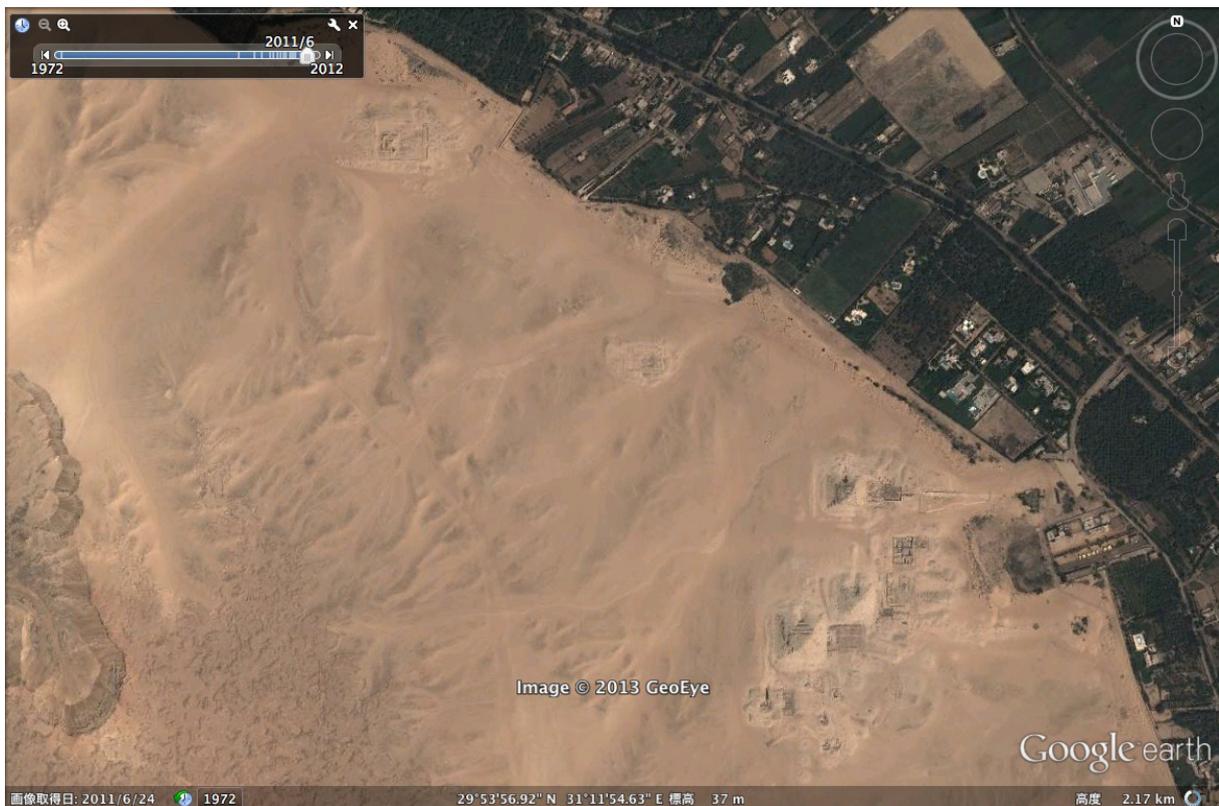


Fig.1 アブ・シールのピラミッド群の周辺

* 早稲田大学高等研究所准教授

カフ王である。自らのピラミッドはサッカラに造営したが、アブ・シールに太陽神殿を造営した。その後継者であるサフラー王は、はじめてアブ・シールにピラミッド・コンプレックスを造営し、その後の第5王朝から第6王朝のピラミッド・コンプレックスの模範となった(Borchardt 1910)。すなわち、ピラミッド本体の規模こそは、第4王朝の王のそれに劣るが、河岸神殿、参道、葬祭殿の規模が巨大化している。また、サフラー王のピラミッド・コンプレックスは、アブ・シールのピラミッド群の中で最も残存状況が良好であり、葬祭殿の中庭は玄武岩が敷き詰められ、16本の赤色花崗岩製ヤシ柱の柱廊が取り囲んでいたことが明らかとなっている。また葬祭殿には、「彫像の部屋」、倉庫、至聖所が設けられた。参道は本来屋根があり、壁面は王を中心とした神学や宮廷に関する浮彫で装飾されたと考えられている。残存する浮彫装飾には、異国の捕虜、飢餓状態のベドウィン、舞踊、航海、ピラミッドの造営作業などのモチーフがある(El-Awady 2009)。ドイツのボルヒャルトは、1902年から1908年にかけてサフラー王のピラミッド・コンプレックスを発掘した際に、サフラー王の葬祭殿の中庭でバステト女神の姿を表したレリーフを発見したが、この場所は新王国時代にバステト女神とセクメト女神の聖所として使用された。

続くネフェルイルカーラー王のピラミッドは、本来6段の階段状ピラミッドであったが、設計変更により8段の階段状ピラミッドとして拡張され、最終的に化粧石に覆われた底辺104m、高さ52mの真正ピラミッドとして完成したという(Borchardt 1909)。これはアブ・シールのピラミッド群の中で最大のものである。このピラミッドの南側には王妃であるケントカウエス2世のピラミッドがある。

次のシェプセスカーラー王のピラミッドは、サフラー王のピラミッドとウセルカフ王の太陽神殿の中間にある未完成のピラミッドの遺構とみられるが、詳細はわかっていない。シェプセスカーラー王の息子で後継者のラーネフェルエフ王は、ネフェルイルカーラー王のピラミッドの南にピラミッドを建設したが、短命のためにピラミッドの上部構造は完成せず、マスタバのような形態の上部構造となった。葬祭殿は、日乾煉瓦製で造営され、参道と河岸神殿は建設されなかった(Verner et al. 2006)。

アブ・シールで最も建築活動が盛んだった時代は、ネフェルイルカーラー王の息子で、ラーネフェルエフの弟であったニウセルラー王の時代である(Borchardt 1907)。ニウセルラー王は、アブ・シールでピラミッド・コンプレックスを造営した最後の王であり、父ネフェルイルカーラー王の王妃で彼の母でもあるケントカウエス2世のピラミッドを完成させた。ニウセルラー王の治世は、高官のマスタバが巨大化した。特に顕著なのは宰相プタハシェプセスのマスタバ墓である。

ニウセルラーの後継者であるジェドカーラー王はピラミッド・コンプレックスを南サッカラに造営したが、彼の家族と廷臣はアブ・シールに墓を造営した。ジェドカーラー王の治世には、アブ・シールの中心は再び南部に移った。第6王朝には、宰相カアルとその家族の墓などが造営された(Bárta et al. 2009)。

アブ・シール南部の古王国時代のマスタバ墓群の約500m西に通称アブ・シール南丘陵と呼ばれている小高い丘陵があり、初期王朝時代からプトレマイオス朝時代までの遺構あるいは遺物が検出されている。丘陵最奥部の南側斜面には、古王国時代初期に造営されたとみられる石積み遺構とそれに付属する地下室がある。地下室は中王国時代に新たに前庭部をもつ入口が設けられ、西側に部屋が追加された。これらの部屋の内部からは初期王朝時代および中王国時代の遺物が出土している。また、この石積み遺構から北東に約15mの地点からは岩窟遺構が検出され、内部からは中王国時代に年代づけられる遺物が出土した。石積み遺構の背後からは第2中間期末から新王国時代第18王朝初期に年代づけられる集団埋葬が発見された。

丘陵頂部での建築活動は、新王国時代第18王朝アメンヘテプ2世およびトトメス4世の治世に最奥部の崖際に造営された周囲を溝で囲まれた日乾煉瓦建造物に始まる。この遺構からは多数のトトメス4世のステラ、彩画片、彩文土器などが出土している。その後、日乾煉瓦遺構の南東に第19王朝のラメセス2世の治世に第4王子でプタハ神の大神司であったカエムワセト王子の石造建造物が造営された。カエムワセトの石造建造物

の北東約40mの位置には、カエムワセトの娘と思われるイシスネフェルト王女のトゥーム・チャペル（神殿付貴族墓）が造営され、地下埋葬室からは石灰岩製の石棺が検出された。

アブ・シールは、末期王朝時代第26王朝になると再び建築活動が活発化する。第5王朝のピラミッド群の南西には、巨大なシャフト墓が数基位置している。これらのシャフト墓は、巨大な石棺を納めた装飾された玄室を特徴とする下部構造と矩形の周壁を特徴とする上部構造で構成されている。これらのシャフト墓の中でも、イウエフアア墓は未盗掘で発見された (Bareš and Smoláriková 2008)。

2. 遺跡の現状と問題点

アブ・シール遺跡は、20世紀の初頭からドイツのボルヒャルトなどが調査を行い、1970年代からチェコ隊が精力的に考古学的発掘調査を継続している。2000年代に一般公開のための遺跡整備が行われ、この時に遺跡の南東部にチケット・オフィスが建てられ、サフラー王のピラミッド参道からプタハシェプセスのmastaba墓にかけて、観光客が歩きやすいように木製の歩道が設置された。しかし、その後比較的短期間で一般観光客は立ち入り禁止となっている。

アブ・シール遺跡全体を見ると、発掘調査時の排土がピラミッドの東側に厚く堆積しており、遺跡全体の景観に大きな影響を与えている。以下、第5王朝のピラミッド群を中心とするアブ・シール地区とアブ・シール湖から東西に広がるアブ・シール南地区に分け、遺跡整備の観点から個々の遺構についての現状を報告する。

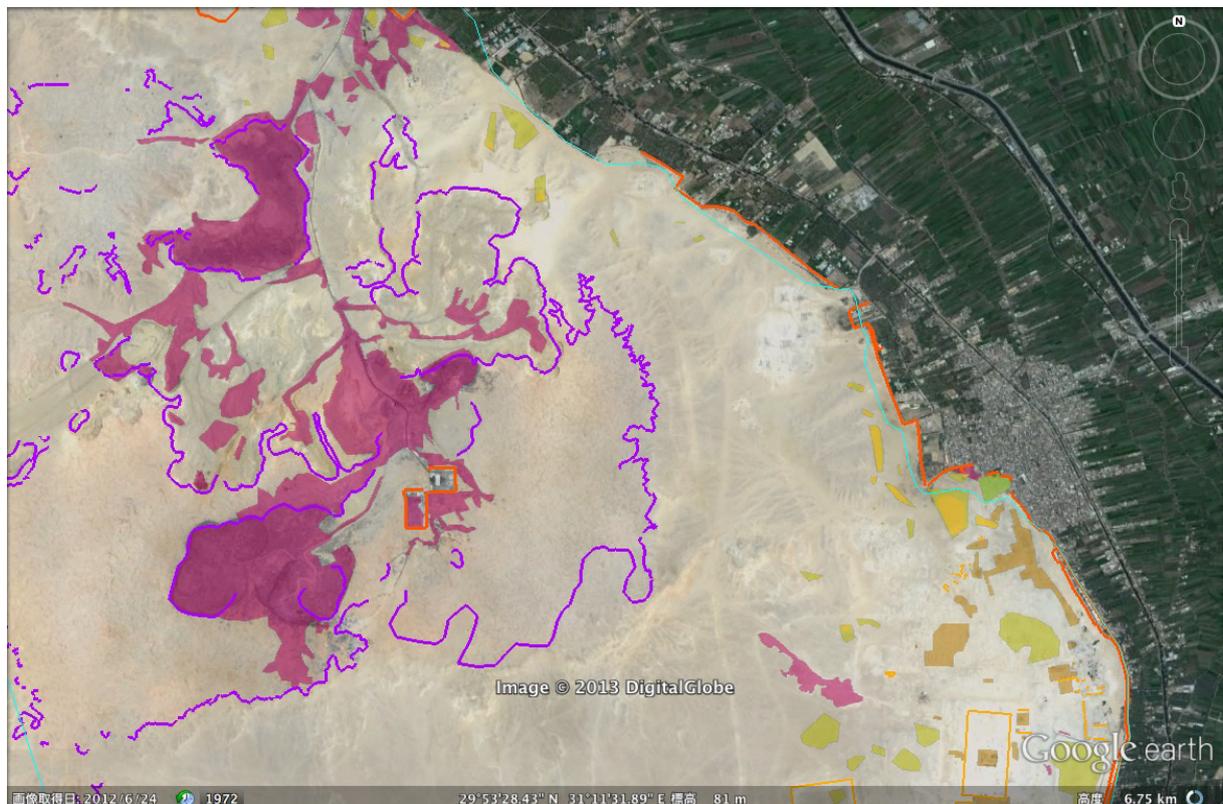


Fig.2 アブ・シール遺跡の現状

(1) アブ・シール地区

①ピラミッド・コンプレックス

チェコ隊によって発掘されたラーネフェルエフ王のピラミッドの葬祭殿は、前述のとおり日乾煉瓦製であり、将来の一般公開へ向けた整備の一環として煉瓦の壁体の側面と上面を新材の煉瓦で覆う方法が用いられている (Sramek and Losos 1990)。

ネフェルイルカーラー王のピラミッドの葬祭殿は、石材と日乾煉瓦を用いた構造物が検出されている。この葬祭殿は、有名なアブ・シール文書が出土場所として知られており、極めて重要な遺構であるが、抜本的な保存修復整備は実施されていない。柱の礎石もほぼ原位置に残存しており、保護のための措置は講じられていない。

ニウセルラー王のピラミッドの東側には、石造の葬祭殿がある。残存状況は比較的良好であるが、修復はほとんど行われていないものとみられる。

サフラー王のピラミッド・コンプレックスは最も残存状況が良好であることから、かつて一般公開用に保存整備が進められた。遺跡整備を目的として、1994年から2004年にかけて参道の発掘調査が実施され、その後随所で修復が行われた。現状では、サフラー王のピラミッド・コンプレックスは唯一観光客に公開可能な遺構である。

②マスタバ墓群

アブ・シールで最大のマスタバであるプタハシェプセスのマスタバ墓は、保存状態が比較的良好なことから一般公開の整備が実施されていた。入口部分の柱が立て直され、修復が完了している。観光客用の説明板やベンチも備え付けられている。

ニウセルラー王のピラミッドの東側に位置する2基の大型マスタバ墓は、比較的良好な状態で残存しているが、保存修復作業は実施されていない。

③末期王朝のシャフト墓群

末期王朝の大型シャフト墓群は、岩盤のタフラと呼ばれる柔らかい粘土質の石灰岩層を掘削して造営されたものである。これらのシャフト墓は、深さ約40mもあるものもあり、発掘調査の保安状の理由から、石材、コンクリート、板等で補強されていた (cf. Bareš and Smoláriková 2008)。ただし、観光のための保存修復整備は実施されていない。



Fig.3 アブ・シール遺跡を望む。
中央に木製の床の道が見える



Fig.4 修復されたプタハシェプセスのマスタバ墓入口

(2) アブ・シール南地区

アブ・シールとサッカラが接する耕地と砂漠の縁辺部には、かつてナイル川の氾濫後に形成されたアブ・シール湖があった。現在、この場所は雑草が繁茂する窪地となっているが、古代は、まさにこの場所がアブ・シールとサッカラの墓地の入口で、そこから南西方向にワディ・アブシールが広がっている。このワディの北側に位置するのがアブ・シール南の古王国時代の墓地である。1990年代初頭から、ここではチェコ隊が発掘調査を継続しており、個々のマスタバ墓の修復が調査とともに実施されているが、観光を意識した整備は今後の課題である。

これらのマスタバ墓群の西300mに位置し、東西に広がるアブ・シール南丘陵は、1992年より早稲田大学の調査隊が発掘調査と保存修復作業を継続している。詳細は別章に委ねるが、丘陵頂部の遺構は、基本的に床面や壁体などを露出させないようにしている。カエムワセトの石造建造物やイシスネフェルトのトゥーム・チャペルは、床面や壁体の周囲を新材の石材で囲み、砂を覆ってさらに礫で覆う保護を行い、日乾煉瓦遺構は古代の煉瓦の上を砂と石灰岩チップで覆い、その上に新しい日乾煉瓦で創建当時の概観をイメージさせるような高さまで覆うという、いわゆるキャッピングと呼ばれる保存整備が講じられている(柏木2005, 2006)。また、イシスネフェルトの墓のシャフトは、保護用の鉄扉が設置されている。丘陵の南側斜面に位置する石積遺構は、発掘調査で露出した石灰岩ブロックの風化が進んでいたことから、上面をキャッピングする措置が講じられている(柏木2006, 2007)。以上のようにアブ・シール南丘陵遺跡は、現状保護という段階に留まり観光のための保存整備は実施していない。遺跡の公開は現地考古省の方針次第ではあるが、遺跡の価値をより理解させるような保存整備が課題として残されている。

アブ・グループからアブ・シール南丘陵の西側までほぼ一直線に道があり、白い轍が南のダハシュール方面まで南北に延びている。これは古代のダハシュールの道の址であると考えられている。近年アブ・グループ付近からバーギーや四輪駆動車がこの道に侵入し、しばしば遺跡を破壊している。また、アブ・シール南丘陵から南東に約500mの辺りから、さらに南東に500mの規模でゴミ廃棄場が広がっており、年々拡大している状況である。このような遺跡内のゴミ廃棄場は、ユネスコ世界文化遺産の文化的景観を維持するという視点からも撤去されることが望まれる。

3. 革命後の被害の状況

2011年1月のエジプト革命後、遺跡の破壊略奪はエジプト全土でみられたが、アブ・シール遺跡も例外ではなかった。被害の状況はGoogle Earthからも確認することができる。まず、第5王朝のピラミッド群のあるアブ・シール地区の南に位置する低位砂漠の丘陵の東側斜面には、かねてから古王国時代のマスタバ墓群の存在が指摘されているが、革命以降この地域に盗掘を受けたシャフトが数多くみられる。Google Earthの衛星画像を見る限りでは、革命直後の2010年10月の画像(Fig. 5)と5月の画像(Fig. 6)では顕著な違いがみられる。すなわち、革命のあった2011年1月末から5月の約4ヶ月間に大規模な盗掘活動があったことが推定される。同様の傾向は、さらにアブ・シール南のチェコ隊の発掘現場のマスタバ群の周辺やアブ・シール湖の東側に広がるイスラーム墓地の西側の地区でもみられる。

2011年2月15日に革命後のアブ・シール遺跡を視察したブルー・シールドのメンバーによれば、現地の査察官から盗掘が横行しているとの情報を得たとしている¹⁾。同月17日にザヒ・ハウス考古大臣(当時)は、ラーヘテブの墓の偽扉が盗まれ、大きな破壊を被ったと発表し、3月2日にチェコ隊の遺物収蔵庫が破壊されたと報告した²⁾。チェコ隊のメンバーMartin Odlerのブログによると、3月21日までにアブ・シールで数百基の墓



Fig.5 エジプト革命以前の阿布・シール遺跡東側（2010年11月撮影）

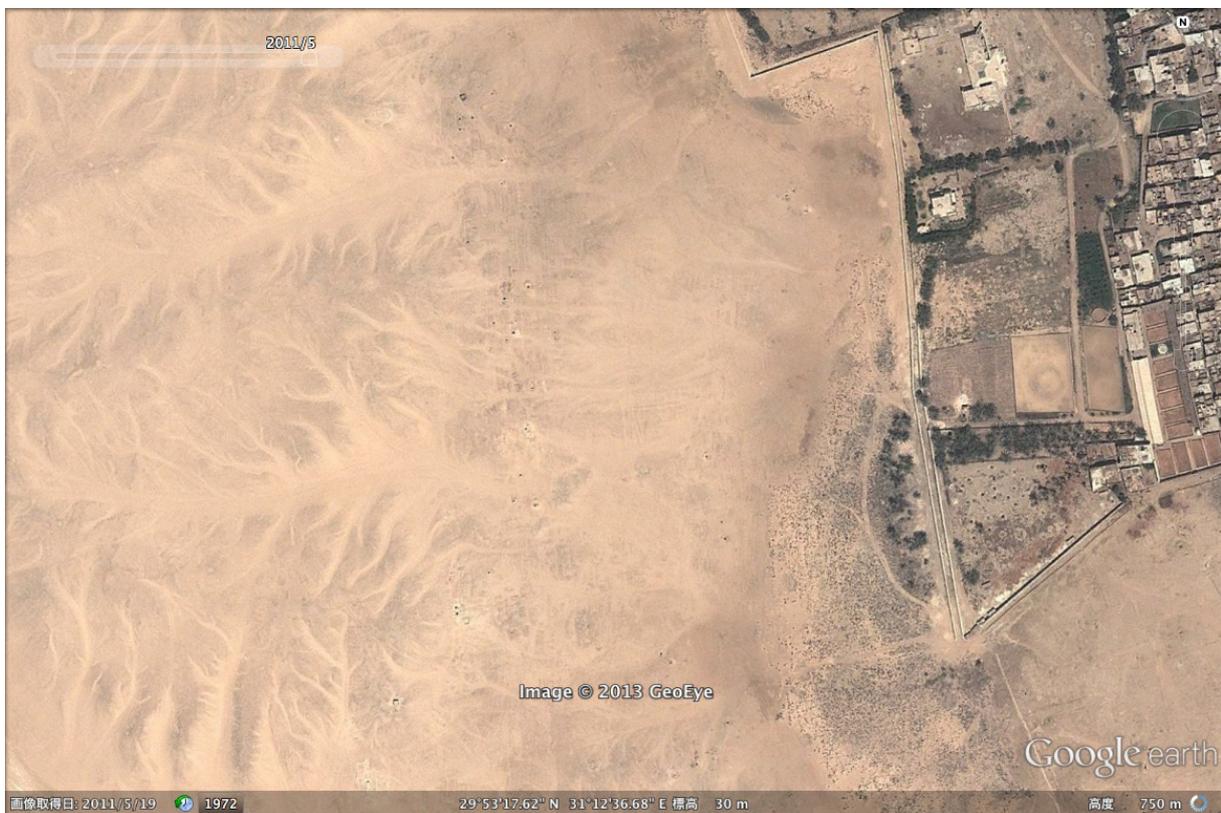


Fig.6 エジプト革命以前の阿布・シール遺跡東側（2011年5月撮影）

が盗掘されたと報告されている³⁾。

10月11日には一連の盗掘によるものと思われるレリーフ・ブロックが発見された⁴⁾。

革命後のアブ・シール遺跡は、盗掘活動だけでなく環境汚染の問題にも直面している。アブ・シールとアブ・ロアシュの西側の砂漠には巨大な採石場とゴミ処理場があるが、革命以降遺跡の付近に顕著にゴミが不法投棄されている状況である⁵⁾。これは、治安が悪化し、取り締まりが緩くなった結果と考えられる。また、採石場の労働者も当該地域で盗掘活動を行っているとの報告もある⁶⁾。

以上のような状況は一向に改善されず、依然として当該遺跡における遺跡の保全は不安定な状況である。2012年9月のアブ・シール南丘陵遺跡の発掘調査の際には、盗掘を行っている状況を目撃し、考古省の査察官が警察を呼び出す状況があった。

4. 保存整備計画の方向性

アブ・シール遺跡は、2000年代に部分的な一般公開への動きがあったものの、依然として発掘調査が進んでおり、一般公開には時期尚早だと言わざるを得ない。しかし、調査研究とそれに伴う保存修復作業の進展に伴い、将来的には遺跡の保存管理を徹底しつつ、一般公開を進めるべきであろう。以下では、アブ・シール遺跡における保存整備計画の方向性を示してみたい。

アブ・シール遺跡は、主に古王国時代第5王朝のピラミッド・コンプレックスやマスタバ墓を中心とする石造建造物で構成されている。現状ではサッカラのジェセル王の階段ピラミッドでみられたような崩壊の可能性の問題は明白ではないものの、石材が崩落しているピラミッドの保護作業が優先的に講じられるべきであろう。また崩落を防ぐだけでなく、より一層の風化を防ぐため、露呈した石材の保護が必要である。葬祭殿によっては日乾煉瓦製のものがあり、キャッピングなどの措置も講じる必要がある。発掘調査と保存修復作業を同時に進めるサッカラのペピ1世のピラミッド・コンプレックスで調査を継続しているフランス隊の遺跡管理に較べると、チェコ隊の遺跡整備は遅れていると指摘せざるを得ない。また、これまでの発掘調査によって残された発掘排土も遺跡の景観を大きく変えているため、移動することが望ましい。

遺跡保存計画のコンセプトとしては、一般観光客にアブ・シール遺跡の魅力がアピールされるものであることが重要であろう。ギザ、サッカラ、ダハシュールなどの他のピラミッドを擁する遺跡と較べて何が異なるのか、何がオンリー・ワンたりえるのか、これを示すことが重要であろう。

アブ・シールのピラミッド・コンプレックスの価値は、巨大なピラミッドが造営された第4王朝の次の第5王朝の王墓地であり、大型のピラミッドを造営するよりも葬祭殿が複雑化、大型化し、同時にそれまでになかった太陽神殿という記念物が造営されたところにあると言える。したがって、地名はアブ・グラープであるが、北西に隣接するニウセルラー王の太陽神殿を含めた遺跡整備計画を策定することが望ましいであろう。しかし、比較的保存状態の良いサフラー王のピラミッド・コンプレックスやアブ・グラープの太陽神殿にしても、当時の壁面を装飾していた浮彫はほとんど残存しておらず、エジプトや欧米の博物館・美術館に収蔵されているのが現状である。こうした現在遺跡から失われてしまったものをどのように本来の文脈で理解させるかということは非常に大きな課題となってくるであろう。たとえば、他のエジプトの遺跡で導入されているように、遺跡の入口にヴィジターズ・センターを設け、そこから入場し、各遺構の特徴や調査の歴史を学ぶ事で理解を深めてから実際の建造物を見学するという方法も考えられるであろう。アブ・シール遺跡は、現在もチェコ隊が調査を継続しており、前述のように直ちに遺跡を一般公開することが現実的ではない。第1段階として既に一般公開が予定されていたサフラー王のピラミッド・コンプレックスとプタハシェプセスのマスタバを公開し、オプションとしてアブ・グラープのニウセルラーの太陽神殿を公開するというのが最も現実的なのではないか。

ピラミッド群の南西に位置する末期王朝時代の大型シャフト墓は、修復もかなり進んでいるようであるが、最短アクセス・ルートを考えて場合、調査エリアあるいは未発掘エリアが含まれていることから、南側から迂回してアクセスするのが望ましいが、南側からのルートを設定した場合にサッカーから進入することになるため大規模な地形の改変を余儀なくされる。これは今のところ現実的ではないので、発掘調査の進展を待つ一般公開を検討すべきであろう。

アブ・シール南地区に関しては、遺跡の入口から南に約1.5kmの位置にあり、砂漠が広がるのみでアクセス・ルートは存在しない。現在発掘調査が進行中であり、観光エリアとして公開するのは将来の課題である。なお、早稲田大学の調査隊が調査を実施しているアブ・シール南丘陵地区の保存整備計画については別章を参照されたい。

註

- 1) http://www.blueshield.at/egypt_2011/mission_report_egypt_02_2011.pdf
- 2) <http://www.egyptological.com/pyramid-fields/abusir>
- 3) <http://www.egyptological.com/pyramid-fields/abusir>
- 4) <http://www.e-c-h-o.org/News/increasedlooting.htm>
- 5) <http://www.egyptindependent.com/news/garbage-dumping-and-archaeological-looting-abu-sir-alarm-residents>
- 6) Ibid.